ある法律事務所
職員の体験から

paralegal.

人と社会に出会う仕事

法律事務所職員　下山田 千栄子

いろいろな人が出入りする。心底，気の毒だと思えることもあれば，自業自得ではないかと思ってしまうこともある。相談者を決めつけてしまうのではなく，「人」やその背景にある「社会」を感じながら仕事をしたいと思う。

◇◇◇ 刑事被告人の引越しに立ち会って

一昨年の12月頃のことだったと思う。私は，事務所の弁護士が国選弁護人をしたある女性被告人の引越しに立ち会った。女性は年齢25歳くらい，いわゆる風俗店に勤める人で，暴力団が関係するごたごたに巻き込まれ強盗致傷で逮捕，起訴された。身柄は逮捕以降，ずっと勾留されていた。女性の住んでいたアパートは店の寮だったので，早く次の女の子を住まわせたいという店側の要望もあって明け渡すことになった。地方で暮らす両親は上京した娘が風俗店で働いていることを，はっきりとは知らなかったらしく，弁護士は親に事情を話すのにずいぶんと気を遣っていた。本人と母親の了解のもと私が引越しに立ち会うことになり，荷物は全て実家に運ばれていった。

当日は引越センターの2人の手際よい作業を私はただ見守っていた。大きなガラスの写真立てに，カラオケで唱っている写真やミッキーマウスを抱いた写真，Vサインを向けて思いっきり笑顔のプリクラなどが隙間なく飾ってあった。普通に街にいる20代の女性の写真である。いきなりの逮捕だったためか，冷蔵庫の中は使いかけの豆腐，味噌などと炊飯器にはご飯が残っていた。私が勝手に抱いていた風俗で働く女性の派手なイメージとは違っていた。部屋は几帳面に整理され，質素な感じさえした。ここでどういう生活をしていたのか，どうしてこんな事件に巻き込まれたのか。女性が利用されたのか，いや女性のほうも深く考えてはいないんじゃないか…。想像が巡った。

◇◇◇ 自分自身の成長の糧にしたい

判決のあと，この女性が弁護士にあてた手紙に「事件のことは人生勉強だったと思って，再スタートをしたい。まわりに迷惑をかけたことを反省している」と書いてきたそうだ。自分の主張が認められなくて悔しい思いをしたこともあったようだ。担当弁護士は強盗致傷共犯の起訴は納得できないと主張していたから，弁護活動としてもかなり大変だったようだ。でも，最後に本人の再スタートの決意を聞いて私もホッとした。会ったこともない，きっとこれからも会うことのない人だが，応援したい気持ちになった。私の勝手な思いこみかもしれないが，仕事をとおして，その「人」の生き方や考えを多少なりとも感じ，私も成長できればと思う。

…はずかしい，話…

当時，この事件の調書を読んだ。

検察官：あなたは美人局ではなかったのですか？

女性：いいえ，美人局ではありません。

こういう世界では，男性をだます専門の「ビジンキョク」という部署があるのだ，初めて知った。それをそのまま事務所の他の事務員や弁護士に話して大笑いをされた。人の生き方に感動しているばかりではいけない。一般教養も持ちあわせないと，いや，これは教養というより常識だろうか。